

---

**家族になろうよ。**

勇希

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

家族になろうつよ。

### 【Zコード】

N7607A

### 【作者名】

勇希

### 【あらすじ】

変わらない景色と変わらない性格。人は一人で生きていける。ずっとそう思っていた主人公がある日色々な事情を持った人間に出会い共同生活（家族）をする物語。主人公はこの生活を渋々受け入れるが果たしてこの生活が終わる頃彼に心の変化はあるのか？

## それぞれの事情

祐一の場合 鬱陶しいある春の朝、学生とかだと出会いや別れがあるが俺には関係ない。なんてたつて天涯孤独な身、もちろん友達はいるがそんなに深くはない。自分で一步線を引いてい。

それはまあおいおい話す事にして今日はバイトがある日だ。朝から晩まで過密スケジュールだ。高校なんかろくに行かず自分の生活を成り立たす為にしてきた事。この生活には満足してる、両親が俺を捨てた事はいまさらどうでもいい話だ。あの日以来一人で生きると決めそして今までこの一人の生活を充実して過ごして。そう、これからもこの先も同じ様に、、、 愛の場合 今日は私の誕生日、でも誰も私の生まれた日なんで祝ってはくれない、物心ついた時には両親はいなく親戚中をたらい回しにされた。

誰も私に興味がなかつた。高校までは通わしてもらつたけど高校卒業して私はすぐに家に出た。あの家に居たくなかった、居たとしてもまるで空氣の様な扱いだから。

### 孝志の場合

れ私は妻に離婚を突き付けられた。

思えば自分勝手な行動でよく家族を傷つけ困らした。人は無くして初めて気付く大事な物がある、だから後悔をする。しかし、、、

洋子の場合 またやつてしまつた、、、これで何回目だらうか?男に騙されお金を盗られてしまつた。

もう貯金も底をついてしまい住む所もない。

これから私はどうすればいいんだろうか、、、

### 優衣の場合

もう何日になるだらうか?

この雨はいつまで続くのだらうか?さすがに家が心配だ。固く丈夫とは言えもう無理だらう、、、このままあそこに住み着くのは。また辛くて苦しい住居探しをしなくてはいけない、、、

## それぞれの事情（後書き）

最近DVDとかが頻繁に起こりますよね。ちょっと違うかも知れませんがこの話で少しばかり家族と言つの大切にしてもうえるとうれしいです。

## 少年は一人の少女と出合った。

祐二

「お疲れ様です」

今日も長いバイトが終わった。

俺が働いてるのは有名な飲食店（チェーン店）だ。

俺はキッチンをしている、理由は他人とそんなに関わりたくないから、言われた料理を調理するだけ、まあそのおかげで自宅でも自炊をしているから経済的には結構楽なのだ。

通い慣れた帰り道を歩いているとふと一人の少女が道端で座つているのを見つけた。うーん、、、邪魔だ！ 何なんだこいつ？ 道に座りやがって！ まあ、いいか。俺は彼女の横を通り歩こうとした時、突然

？

「あの～すいません。私怪しい者ではないんですよ～」

そう言つて彼女は俺の前に立つ、怪しい者ではないつて言つた奴に限つて怪しいんだよ！

？

「えとですね～怒らないで聞いて下さい。1000円貸してくれませんか？」

祐二

「はあ？」

こ、こいつ何言つてんだ？ 馬鹿か？ この女。俺は怒りを何とか沈めてその女に質問をした。祐二

「何故俺が君にお金を貸さないといけないんだ？ 名前も何も知らないんだぞ？ おかしいだろ！」

?

「えと、名前は優衣です。実は家が壊れてしまつて帰る所もなれば食べ物も何日も食べてないんですよ、ヽヽヽ」

L

!

俺はそういうと自宅に向かう、

テクテクテク

「、、、、、、なんだよー。」祐

優衣

卷之二

と一言残し立ち去ろうとしたらい

優衣

「あの～わがままついでにですね～ 晩油まらして下さい！お願いします。河でも～ます。だから、お願ひ～ます。」

彼女のあまりの剣幕に俺はびびってしまい、 、 、

「……」で寝る。俺は明日も出撃しない日も寝る。

卷之六

「すいません。私なんか」

祐

「もうここにから、寝ひ

優衣

「はい、すいません。ありがとうございます。」

- 次の日

「あの～起きてください。起きてください～！」

優衣

「うう、～、もう朝か？」

優衣

「はい！ それでですね～ あのお礼として～ご飯を作つてみたんですが。

祐一

「うむ、～」

俺はテーブルに置いてある物を見て思わず驚いた。 これぞ日本の朝ご飯つて感じの物が並べられていた。

祐一

「これ全部お前が作つたのか？」

優衣

「はい！ 張り切つて作りましたよ～ 食べて下さい。」

祐一

「いただきます。」

「パクパクパク」

祐一

「何じゅこりゅ～

優衣

「そんなんに美味しいですか？」

「早く出ていってくれ

優衣

「えつちゅう何で、～、～」

祐一

祐一

「お前、砂糖と塩間違ってるだろ？俺を殺す気か？」

優衣

祐一

優衣

優衣

「あ、お弁当作るの忘れてしゃいました」祐一

「、、、じやなくて田で行くんだよ。金も貰してやつただろ?」

古  
一

「どうした？」

優衣

「お金、 、 、 せつもの朝、 、 、 飯作るのに使ひやせいました、 、 、 」

「どうが。

優衣

「泣」

優衣と説く女を家に置いておく事にし、バイトが終わって帰ってきたからどうあるか？を話すの事を決めた。

祐

「めんどくせえな。」

彼は少女に動かされる

祐二

「お疲れ様です」

ようやく今日のバイトも終わりを告げた。

俺はバイトが終わるなり急いで自宅に戻った。

祐二

「ただいま」

優衣

「あっお帰りなさい。」飯にする？それとも、、、、

祐二

「待て。何故そんなに馴染む？とりあえず飯も風呂もいらん…そこ  
に座れ」と優衣は正座でちよこ  
んと座った。何から話そつか？

祐二

「優衣、俺と会った時にお前は一人で道に座つてたる？んで帰る  
所がないやうなんやうしてたよな？あればどうこう事だ？」

優衣

「あは～」

祐二

「あは～じゃねえ！」

優衣

「帰る所はないです。家が潰れたんです。」

祐二

「はあ？なんで？てか親は？」

優衣

「いや～この雨で、びしょびしょで大破したんですよ。」

「いっつ家が大破したのになんでこんな笑

顔なんだ？」

優衣

「両親はいません。私が小学校に上がるとき同時に帰つてこなくなりました。」

祐一

「あつそ、そつか、、、」

優衣

「あの～もしかして同情とかします?もしそうなら私と一緒に住んで下さい。お願いします。何でもします!迷惑かけませんから!」

祐二

「はあ?」

「ちょっと可愛そうと思つた俺が馬鹿だつた。この女は何故か貪欲だ。何故だ?っていうかなんだ?」

祐一

「お前自分で何を言つてるか分かつてますか?」

優衣

「はい!ですから~」

祐二

「一度も言つんじゃねえ!」

優衣

「大変おこがましいつて言つのは分かつてます。」

祐一

「おこがましすぎるよ~何だよ、そりや!」

優衣

「分かります。分かります。けど、でもお願いします。次の家が見つかるまででいいですから!」

祐二

「、、、」

優衣

「祐一さんの邪魔はしません。空氣の様に扱つてくれて結構です。だからお願ひします!」

祐一

「いや、だから、、、」

「、、、」

優衣

「お願ひします！――！」ちつ仕方ないか、、、すぐ出てこゝだらつ、  
そうだな。

「  
表二

「長期じゃなかつたらい! それと俺のやる事に口出しはするな。それは守れるならちよつとの間なら住む事を許す。」

「藍ですか!!? あつがいひー!! あー!! 」

「うおーーへいひへなー馬鹿ーあひひー

そんなこんなで始まつた俺と優衣の共同生活。

優衣

## 少年とオヤジの会話

「さーこー、、、きて下わーこー、、、起きてく

ださい～

祐一

「うん?、、、誰だ!~?」

優衣

「えどー、、、私です。優衣です!」

「ああ、そういうえば俺」いつと一緒に暮ら

すと言ひちまつたな、、、起きるか。

優衣

「おはよウジダルコモスー!もづじ飯出来てますよー!食べますよー?」

祐一

「いらん。お前が作った飯なんか食えない、、、」

優衣

「ひ、ひどー!今日は大丈夫です!任してください!」

に座つた。

モグ

祐二

「あれ?普通に美味しいぞ?何でだ?」

優衣

「へつへー実は料理は得意なんですよー!」

祐一

「ふ~ん

俺は無関心のまま箸をすすめ、」飯を平ら  
げた。

優衣

「あつじゅあそそそろ私は学校に行つてきますね～」

祐一

「あつおひ。じゅあな。」

「 - ガチャン」

ふむ、飯を平らげて、優衣の奴が学校に行つた。今日はバイトは休みだ。さてと、どうしようか？ うーーーーん

ブラブラしに行くか。俺は服を着替え商店街に向かった。しかし平日は人が少なくていい。

これは飲食店で働いてるやつの特権つてやつか？ じばらべブララしてると腹が鳴つた。時計をみるともう昼過ぎだ。

俺は適当に店に入り昼飯をすました。

だ、 、 、 何かする事ないかな？ まあこれが友達のいないデメリットではある。よし、CDでも見て帰るか！ 俺は近くのCDシヨップに入り適当に欲しいCDを買って帰路についた。

その途中、 、 、

肩を叩かれたので後ろを振り替えるとそこには見知らぬオヤジがいた。

「すまぬ。少年、君の名は祐一君だね？」

祐一

「はあ？」なんかやばそうな奴だな。

「いや、違います。」

？

「ふつふつふ、待てい！ もう調べはついている！ 私はこいつこいつ者だ。」

」

祐一

「えつ？」

このオヤジ警察か？ 何だ？ 俺は一般人だぞ？ ま、まさか、優衣か？

「もう、逃げられはせん。さて、君の家まで案内してくれ。」

？

祐二

「ちつ、なんだよ！俺は知らないぞ！あいつが勝手に！」

？

「男は男らしくするものだぞ？びびっているのか？ウオオ～」

な、何なんだ？

まだとめんどくさくなるな。 しかしこのまま優衣の奴を渡したら大丈夫だよな？

許せ優衣よ。

俺は無実だ。

祐一

「ちつ、じつちだ。」

？

「ふつふつふ、早く歩けい！」

変なオヤジを連れ俺は自宅に向かった。？

「ちつはつはつは～祐一よ！」

何だ？このオヤジのハイテンションは！

？

「ふむ、、、どうするかな。」

祐二

「おい！おっさん！着いたぞ。」

ヤジを家の中に入れしばし考えた。

優衣のやつは確か親はいないと言つてたよな？

だから

家でで捜索願いは出されてないはず、、、じゃーなんで警察が

？ うーん、、、

祐二

「おっさん！あんた優衣に話があるんだよな？」

？

「その前に、、、人を家の中に入れたら茶ぐらい出せええい！」

はあ？こいつ、、、

祐二

「いいから質問に答えろ！」「

？

「ふつふつふ、私は優衣という少女など知らぬ（あつぱつ）」「

？

「ふつふつふ、私は優衣という少女など知らぬ（あつぱつ）」「

？

祐

「あなた警察だろ？」

一  
ガチヤ

優衣

たたじい

卷之三

答えるな！出でいに！」

1

何故、おーし優衣君  
お茶をくれたい」

「あつはあい！」

祐

出でた！

卷之三

卷之三

「んた警察なんだろ?」

？

そういうとそのオヤジは名刺を差し出し

卷之三

• • • • •

「おい！ てめえ！ 僕を騙したな！」

卷之三

祐

「気持ちの悪い笑い方してんじゃねえ！」

キレた！久々にキレちまつたよ！

俺

はそのオヤジに殴りかかった！

孝志

「うむ、来るか？ほお～早いパンチだ！だがしかし！」

しかし・・・

「ドゴッ！」

祐二

「ガハッ」

バタン

優衣

「ゆ、祐二さん！祐二さん！」

優衣が必死で俺の体を揺らしていくが力がでない。

「グッバイ、、、」

「グタ」

孝志

「心配する事はない。彼はお腹が空いて寝てるだけだ。優衣君、、、

優衣

「は、はい？」

孝志

「ご飯を作ってくれ。できれば油がギタギタの中華を。」

優衣

「えつ？あつはい。」

「うん？何だこの香りは？いい匂いだ、、

祐二

「う、うん

優衣

「祐二さん！」

「あれ？優衣、、、何かいい匂いが。」

孝志

「先にいただいていい。」

祐一

「あれ？お前、この野郎！」

優衣

「祐一さん、飯、飯。」

祐一

「おー！何故あいつも飯食つてんだ！？」

孝志

「教えてやる。それはな、腹が減つているからだ。」祐一  
「ちめえー！何言つてんだよー！」この野郎！

孝志

「くつくつ、来るか？私はお前より強い！」

優衣

「ひよ、せめて下せー！」

祐一

「くたばれ、おっさん！」

孝志

「笑止。」

優衣

「やめなき、やめなき、やめなきー！」

祐一

「命拾いしたな。祐一よ。」

優衣

「まひ、祐一さんも、飯食べて下せー。」

祐一

「うん？あー、」

俺は箸を取り唐揚げを取ろうとしたら

「パチン」

祐一

「こいつ…何だ？」

孝志

「祐一よ。『飯を食べる時はいだきます』ではないか？」

祐一

「『』は俺の家だ…何をしようが俺の自由だ…」

孝志

「私は当たり前の事を言つておるのだよ。」

祐一

「何なんだよ、『』…しかし、『』で揉めると優衣のやつがつるそこからなあ…仕方ない。」

祐一

「いただきます。」

孝志

「うむ、それでいい。『』は『』は…」

祐一

「俺はある事に気が付いた。」

祐一

「お…お…あんた人の家で何ナチュラルに住み着いてんだ？」

孝志

「ち、ちやく付いたか。祐一よ。」

祐一

「早く出でこけ…」

孝志

「同じ食卓で『』飯を食べたらちつ家族同然。私はお前の父だ。」

優衣

「おお父さん…」

祐一

「『』同意しないよつ！何ふざけた事言つてんだよ…訳わからねえぞ？」

孝志

「回じ食卓で」飯を食べたら、

祐

「何度もいうんぢやねえ！」

孝志

私は今住む家を探しているのだよ。

祐

「たかで何だよ！ 知らねえよ！ 関係ねえよ！」

四

私はここが僕は入った  
父は嬉しい限りだ

卷二

お前は俺の父親じゃねえ！ 赤ん坊から出て行け！」「コソコソコソ

右

「つて何表札作つてんだよ！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7607a/>

---

家族になろうよ。

2010年12月8日02時20分発行